

艦息？いいえポケモンマスターです。

晴貴

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

気が付けばなぜか大海原に独りきり。

その身に宿したのはポケモンの力。

艦娘？ 深海棲艦？ なんすかそれ？

え、ポケモン知らないの？

……とりあえずなみのりとダイビングできれば雇ってください？

目次

第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
36	26	17	9	1

## 第1話

気が付けば視界は青一色だった。

それもそのはず。見上げれば雲ひとつ無い、抜けるような晴天。下を見れば透き通るような、けれども深い藍色の海。ついでに辺りを見渡してみても陸地の影も形もない。

そんな大海原の真ん中で、俺は水面に座っていた。

「いやいやいやいや、待て待て待ておかしいだろ」

とりあえず冷静に現状を分析してみたがどこもかしこもおかしいことだらけだった。

何ひとつとして意味が分からない。平静を保ってつてのが無理な話だ。軍人だつて狼狽えるレベル。

「まずここはどこなんだよー」

叫んでも仕方ないかもしれないが、ついつい声が大きくなる。

どこか、といえば海だ。んじやどこの海だ？そもそも俺なんで海にいるの？

思い返してみても部屋でポケモンやってたのが最後の記憶なんだけど……。そのまま寝落ちしたと思ったら、目が覚めたら海の上というのが俺の置かれた状況だ。

まさか夏休みに突入してから毎日部屋でゴロゴロしてるのを見かねて島流しでもされたんじや……。

「……そこまでサイコパスな親じやないだろ」

勉強しろだのなんだのと口うるさい親ではあるけど、息子を海に漂流させるほど常識ぶっ飛んでるわけじやない。普通の感性を持った親だ。

ただし俺の身に降りかかっている事態は普通じやない。

「つーかさ、なんで俺は海の上に座れてるわけ？」

ある意味これが1番の超常現象じやね？だって海の中で浮いてるんじやなくて、海の上に座ってんだぞ？アメンボかよ。

試しに立ってみたら普通に立てた。マジで……？

俺は超能力にでも目覚めたのか？寝てる時に無意識で大海原までテレポーテーションしてきたとでも？

ありえない……と否定したいが、出来ない。否定する要素よりも肯定する要素の方が多いんだもの。

これで十数年培ってきた常識を投げ捨てれば晴れて自称超能力者の誕生である。

「……この際、俺が超能力者だろうが白昼夢を見てる妄想野郎だろうが何でもいい。とにかく人を探そう」

色々考えるのはそれからだ。

しかし寂しいと独り言が多くなるってのは本当かもな。思ったことが口に出てしまう。

そんなことを考えながら俺は一步を踏み出し、そして盛大に転じた。

「はぶー」

い、いてえ……水面におもつくそ顔面たたきつけちゃまった。鼻血出てない？大丈夫？

顔をペタペタと触る。濡れてるが鼻血は出てないな。

つか海の上歩くのむっずい！全然バランス取れねえ！

その後も30分ほどの間に何度もトライしてみたが、初めてスケート場に降り立った素人のごとく転倒をくり返す。

……どうすんだよこれ。このままじゃ飢え死に確定なんだけど。もう途方に暮れるしかない。

ひとまず海の上に寝転がる。不思議なことにそれで体が沈んでいくこともなく、ただ海の上をたゆたう。このままどつか人のいる場所まで流れ着いたりしねーかなー。

空を見上げながらそんなことを考える。まあ流れ着いた時にはすでに死んでそうだけど。

はは、笑えねー。笑う気力もねーよ。

「……ん？」

ふと、波の音に混ざって違う音……鈍い爆発音のようなものが聞こえた……ような気がする。

あくまで気がするという程度の、微かな音だったが。

「……違う、聞き間違いないじゃない。確かに聞こえる」

耳を澄ませばその爆発音は断続的に聞こえる。その正体はいまいち分からないが。

この音を辿っていけば人に会えるか？ 確証はないけど自然現象の音とは考えにくい。逆説的に人もしくは人工的な何かがある可能性は高い。

でもなあ、爆発音って時点で嫌な予感がすんだよなあ。いやまあそれっぽいってだけで爆発物がどうこうと決まったわけじゃないが。

「って、なんか音が近付いてきてない？」

うだうだ考えてる内に爆発音らしきものははっきりと、そして大きく聞こえ始めた。それが徐々に迫ってくる。

え、これヤバイ？ ヤバイの？ 逃げた方がいい？

いや、どうやって逃げるんだっての。歩けないんだぞ。匍匐前進でもすりゃいいのか？

やってみたら鼻に海水が入った。めっちゃくそ痛い……。

そんなバカなことをやってたせいだろう。空気を切り裂く音がしたと思ったら、次の瞬間俺から数メートル離れたところに巨大な水柱が轟音と共に出現した。

「なんだあああああ!？」

その衝撃波と高波に襲われ、俺は叫びながら為す術もなく水面をゴロゴロと転がる。波に飲み込まれて海中に引きずり込まれないだけ幸いだっただ。

まあこの状況そのものは不幸だがな……。

おかげで全身ずぶ濡れ、海水もがぶ飲みしたせいで口の中が異様にしょっぱい。なんかもう萎えるわ……。

「ちよつとアンター！ こんなところで何してんの!？」

「はーっ。」

唐突に声がした。よつん這いの姿勢からなんとか立ち上がり、声が出した方を振り向く。

いつの間にかそこには4人の少女がいた。全員身長は150センチ

ちくらいで、なぜかセーラー服を着ている。そして俺と同じように水上に立っている。

しかし何より目を引くのは彼女達が背負っている見たこともない機械と、腕に着いている2門の砲塔らしきものを備えた装置。

「アンタも艦娘……じゃない！なんで男なのよ！」

「でもこの人、浮いてるよ。艦装はないけど」

「ますます意味分かんない！」

「楽しくおしゃべりしてるとこ悪いんだけど、そんな余裕はちよーつとないかな」

「敵の艦隊がもうすぐそこまで来てるよ、曙ちゃん……！」

意味が分からんのは俺も同じだが、自分より切羽詰まってる人が目の前にいると逆に落ち着けるってのはあながちウソじゃないらしい。

まあだからといって状況は何ひとつ変わらないんだが。

「アンタ艦娘？それとも人間？」

曙ちゃん、と呼ばれていたサイドポニーの少女にそう問い詰められる。

だが『かんむす』ってなんだ？そんな言葉聞いたこともないぞ。

「人間だけど……」

「じゃあなんで海の上に立ってるわけ!？」

「その理由は俺が知りたい」

割りと切実に。

なんて実りのないやり取りをしていると再び衝撃波と共に水柱が上がった。それも今度は3つもだ。

「うおおおおお!？」

だから何事なのこれ！

そういやさつき、黒髪の子が「敵の艦隊」とか言ってたような……。

艦隊、つまりは複数の軍艦ってことだ。もしかしてこれって軍艦からの砲撃なのか？

言いたいことは山ほどあるが、とりあえずそれって人に向けて撃つもんじゃなくない？てかさんなもんボンボン撃ってくるってここは

日本じゃない可能性が出てきたぞ……。

「くっ……潮はコイツを連れて撤退！あたしが殿を務めるから漣と隴は援護しなさい！」

「殿って、まさか軍艦と戦うつもりか!？」

「当たり前でしょ。あたし達は艦娘なんだから」

曙は毅然と言い放つ。そこに迷いはなく、他の2人も異論を挟む様子もない。かんむすってのはそういう存在なのか？確かに砲塔みたいな武器を持つてるけどさ……。

「みんな……」

「早く行きなさい、潮。民間人を巻き込むわけにはいかないんだから」  
民間人ってのは俺のことだよな。その口振りからしてこの子達は軍に属する人間なのかもしれない。

だから民間人の俺の命を最優先しなければならず、その為に潮という少女が俺を連れ先行して逃げるという判断を下した。

そして俺を逃がすために曙、漣、隴の3人はここに残ることになる。  
いやまあ彼女達が軍人ならそれは妥当な選択なんだろうけど、こんな見た目小学生の子達に助けられるっていうのは……。

「……着いてきてください。水上航行はできますか？」

「いや、立つだけで精一杯で……」

「ならあたしが曳航えいこうします。捕まってください」

「ああ……」

潮の小さな肩に捕まり、情けなくとそのまま引つ張られながら曙達の元から離れていく。

彼女達も怖いはずだ。敵の艦隊と戦うなんて。

潮も辛いはずだ。戦場に仲間を置いて逃げるなんて。

それでも俺にできることはない。なんの力も持たない、一般人の俺では。

どちらも無言のまま俺は潮に引かれていく。それからしばらくし、3人の姿が見えなくなった頃、背後から一際大きな爆撃音が鳴り響いた。

潮の肩がビクツと跳ねたのが、その肩を掴んでいる俺にはしつかり



と伝わってきた。

驚いた……んじやないよな。たぶん怖いんだ。

仲間が戦っていることが。仲間が傷付いてしまうことが。……死んでしまうかもしれないことが。

戻りたいなら俺を置いて戻ってくれ——。

なんて、どの口が言えるというのか。彼女達は俺を助けるためにこんな決断を下したんだ。

何もできない、助けられるだけの俺がその覚悟を無かったことにするような言葉を吐けるわけがない。置いてけぼりにされたところ野垂れ死ぬだけだ。

なんなんだよ、この状況は。気が付いたらなぜか海の上に浮いて、わけも分からない内に軍艦の戦いに巻き込まれて、終いにはこんな年端もいかない少女におんぶで抱っこだ。

背後から聞こえてくる爆撃音は激しさを増していく。

何かできることはないのか？ムダだと分かっているてもそう思わずにはいられない。

少女に危険も覚悟も押し付けて、ただ助けられることしかできないのか？

そりゃ俺は無力だけどき。

アホだけど、本当に超能力に目覚めたんだったら何かしてやれることもあったのにな、とか考えてしまう。

今なら例えば潮をテレポーテーションで曙達のところに送ることだって——。

そう思った瞬間、眼前には曙達の背中が現れた。

「ん？」「え？」

俺と潮の呆然とした声が重なる。そりゃそうだ。

そして俺達に気付いた曙達も驚きの声を上げる。

「ちよ、ちよつと潮！」

「なんで戻ってきてるんですか!？」

「……というかどうかやって戻ってきたの？」

「えっ・えっ？」

事態は混迷を極めるが、それは曙達にとつても同じだった。むしろ俺の方が状況を理解しているかもしれない。

あくまでも可能性の話だ。それもかなり荒唐無稽で、頭の出来を疑われるような。

けどそれを実証する暇も説明する暇もない。曙達の向こう側には見たこともない奇怪な存在がいる。

あれが潮の言っていた敵の艦隊だろうか。

血の気のない真っ白な肌と白目、そして長い黒髪。それだけで幽霊に通ずる不気味さだが、その両手には盾のような形状をした塊を備えていて、さらにそれには計10門の砲塔がついている。

そいつと並ぶように白い肌に白い髪、そしてセーラー服の上だけ着て下半身は下着丸出しという痴女的な奴までいる。

他にも変なヘルメットとデカイ手袋を装着した奴や、新幹線の先頭車両に巨大な口がついたようなものも。

端的に言うとうち気持ち悪い。そしてめっちゃ怖い。命の危険を感じる。

「もう、なんなのよ！・とりあえずアンタは早く逃げなさい！」

曙はそう言うが、この状況で俺に逃げ延びる術はない。

……いや、ないことはないんだ。俺の頭イッてる仮説が正しければ逃げられないこともない。

ただし仮説が正しいなら、俺に逃げるという選択肢はなくなる。そしてそれが正しいかどうかはこれから分かる。

俺は問答無用で4人を抱きすくめた。右腕で曙と潮、左腕で漣と臙。

俺の突飛な行動に誰もが不意を突かれてなすがままにされる。セクハラと言うなかれ、俺も必死なんだよ。

黒髪の女が俺達に砲口を向ける。かんむすというらしい曙達がどうかは知らないが、あれに撃たれたら俺はバラバラと砕け散って肉片になるだろう。

そんな未来は絶対に御免被る。

砲口から砲弾が放たれる瞬間、俺は飛んだ。飛んだ、という表現が適当かはさて置き、俺の直感はおおよそ正解だったらしい。なにせ狙い通り、一瞬で敵の艦隊の背後を取ったんだからな。

大量の水飛沫が目眩ましになったおかげか、あいつらが俺達の姿が消えたことに気付いた様子はない。

「今だ、狙えー！」

俺の短い言葉に4人がハッと我に返る。きつと何が起きたのかは分かっていないだろう。

ただ今が千載一遇のチャンスだということは理解していた。

「――全門、斉射！」

曙の合図の直後、4人の砲塔が轟音と共に火を噴いた。

## 第2話

「か、勝ったあああ……」

不気味な化け物が完全に沈黙したのを確認して、俺は力なく崩れ落ちた。

情けないかもしれないが、なんの準備もなくいきなり命のやり取りをしたんだ。むしろよくやった方だと自画自賛してやりたい。

やったぞ俺、すごいぞ俺。生きてるって素晴らしい！

しかしあいっら背後から一斉射撃されても沈まないとか頑丈すぎるだろ。曙達を背後や真横に移動させてノーガードのところに撃ち込むこと4度目でやつとこさ撃沈って。

そもそもなんだったの？あいっら。

「ねえ、ちよつと」

「ん？」

生の悦びを実感していると曙が話しかけてきた。勝利の直後だというのにその瞳は厳しい。というか怖い。

思わず後退りしそうになる。幼女にメンチ切られてビビる男子高校生とか……。

「アンタ何したの？」

曙から放たれたのは予想通りの質問だった。後ろの3人も俺を注視している。そりや気になるわな。

とはいえ俺も全部把握できてるわけじゃないんだよねえ。なんと  
言えればいいのやら。

「えーつと、まあ簡単に言うてレポート……かな？瞬間移動ってやつ」

「やつぱり！くうく、そんないかにもチートです的な能力持ってるとかお兄さんやりますねえ！」

「あ、ああ、どうも……」

「何いきなり信じてるのよ漣！」

やたらテンションの高いピンクの髪は漣というらしい。となると

消去法で茶髪の子が朧か。

その朧は漣とは対照的に落ち着いた様子で言葉を口にする。

「でもそれ以外に説明できる？誰よりも瞬間移動を体験したアタシ達こそ、このお兄さんの言ってることが真実だって分かっていると思うけど」

「そ、それは……」

朧の反論を受けて、曙は言葉を告げずに押し黙る。

そんな空気の中で漣がこんな提案をしてきた。

「お兄さん、ものは提案なんですけど漣達を瞬間移動で鎮守府まで送ってもらえたりしません？中破寸前まで行ってるので帰るのも結構辛くって」

言われて気付く。確かに4人とも結構ボロボロだ。特に衣服が大変なことになっていて、見た目小学生くらいとはいえまじまじ観察するのをためらうレベル。

ただ骨折や流血といった怪我らしい怪我をしていなさそうなのは救いだっただ。

「あー、その鎮守府？ってのはどの辺」

「ここから西に……だいたい180キロくらいですね」

漣が指を差した方角を見やる。俺の目には大海原しか写らないが、向こうに鎮守府というのがあるらしい。

いけるのか？

「……ものは試しだ。とりあえずやってみるか」

「何よその不確定な言い方。確証はないわけ？」

「さつきみたいな近場ならまだしもそんな長距離だと不安はある」  
なにせ自分でもよく分かってない力だからな。

自信を持って「上手くいく」なんて言い切れるわけがない。

「……どうする？」

俺の言葉を受けて4人が頭を突き合わせるようにして相談を始める。

正体不明の男のおかしな力を借りるか、多少の疲労はおして確実な方を取るか。

その結論はすぐに出た。

「じゃあ今回は遠慮するってことで」

「まあその方がいいわな」

失敗しても責任とか取れないし。

「そうと決まればさっさと帰るわよ。当然、アンタにもついてきてもらうから」

「了解。ここに放置されたら困るから連れてってくれ」

「そう。それじゃまた曳航するからあたしの肩に捕まりなさい。変なところ触ったら承知しないんだから」

曙は口こそあれだが俺を逃がそうとしてくれたり気を遣ってくれたり悪い子じゃなさそうだ。

これでなんとか人のいる場所まで行ける。どこかも分からないまま、大海原の真ん中に一人でいるのはかなりの孤独と恐怖を感じただけにようやくホツとした。

「……一人ぼっちは、寂しいもんな」

ホツとしすぎてそんな言葉が漏れた。いやこれ死亡フラグじゃね？

せめて鎮守府とやらに到着するまでは緊張感を持つてた方がいいな。また深海棲艦とやらに遭遇するかもしれないし。

しかし掴んだ曙の肩のなんと細いこと。これでよくあんな化け物と戦えるもんだ。

そんなことを思いながら漣を先頭に潮、曙とその肩に捕まる俺、殿に隴と1列に並び、そのまま引かれる。しばらくそうしていると不意に曙が口を開いた。

「改めて聞くけどアンタはなんで艤装もないのに海の上に立てるのよ？」

「その答えは俺が知りたい」

2度目の問いに、俺も同じ答えを返す。

「瞬間移動なんてできるからそれも超能力なんじゃないの？」

「別に俺は超能力者ってわけじゃないし」

「じゃあなんなのよ？」

「普通の高校生」

「それはない」

曙と隴の言葉が被る。

まああんなことやったあとに一般人ですって言われて信じるわけないよな。

ただ俺はさつき海の上で目が覚めるまで本当にその辺にいる一介の男子高校生だったんだけど。

その後も曙や漣にあれこれ聞かれながら彼女達の拠点、横須賀鎮守府を目指す。その間に俺の方からも色々と質問させてもらった。

そして知り得たのが以下についてである。

まず“かんむす”とは艦娘と書くらしく、かつて沈没した日本の軍艦の記憶を持って生まれ変わった少女達のことらしい。もちろん曙達もそうだ。

……いきなりの超展開である。とりあえず軍艦を擬人化したような存在として認識することにした。

で、さつき戦つたのが深海棲艦。詳しい生態……そもそも生物かどうかも分かっていないとのことだが、あいつらは揃いも揃って人間を激しく忌み嫌っていて人間や彼らを守る艦娘を攻撃してくるらしい。

その理由も不明であり言葉による交渉も不可能なんだとか。

艦娘に深海棲艦。そんな存在は初耳だ。

しかし曙達によればこんなことは小学生でも知っていることであり、言うなれば常識だ。あくまでも“この世界の”という枕詞がつくが。

俺の世界にとって人類最大の脅威は同じ人類だ。深海棲艦なんて化け物じゃない。

艦娘なんて影も形も存在しなかった。

ここまでくればこういう考えを持たざるを得ない。

もしかしたらこの世界は、俺がいた世界とは違う……いわゆる異世界というやつなんじゃなからうか。

しかしそう判断した割には冷静だな、俺も。まだ実感できてないだけか？それともさつきの戦闘で高揚しすぎた反動で今は余計に落ち

着いているだけなのか。

なんにせよ仮にここが異世界だとするなら優先すべきは生活環境を得ることだ。

この世界に定住しなければならぬにしろ元の世界への帰還を目指すにしろ、生きていく環境を用意しなければ話にならない。身元も経歴も一切ない人間にとってそれはかなり困難だが……。

なんて内心で愚痴りつつ曙達に引かれていると、深海棲艦と遭遇した際に発信していたという救援要請により出撃してきた救援部隊と合流した。俺もついでに保護してもらって横須賀鎮守府まで直行することになった。

横須賀つてことは神奈川か。艦娘は日本語喋ってるし一応日本ではあるんだよな。異世界つてよりはパラレルワールドの方が近いのか？

なら文化的な面で生活に悩むことは無さそうだけど。

ちなみに救援にきてくれたのは戦艦の金剛に翔鶴と瑞鶴という空母、そして陽炎・不知火・黒潮の駆逐艦3人、計6人だった。

全員が曙達の無事を喜び、深海棲艦を沈めたということに驚いていた。どうやらあいつらは曙達だけで勝つにはかなり手に余る相手だったらしい。

すげー頑丈だったもんな。デフォルトで「かたくなる」でも積んでんじゃねーか？

あと瑞鶴と不知火の俺を見る目が鋭すぎる。俺はそんなに不審か？……まあ不審だよな。

一応曙達が説明してくれたが、レポートの下りで救援部隊全員の視線が訝しげなものに変わった。そりゃ又聞きでんなこと言われてもはいそうですかとはならんよね。

とりあえず敵意はないことをアピールしておくことしかできなかった。



「——以上が今回の遠征についての報告よ、クソ提督」

曙がいつも通りのクソ提督呼びわりで報告を終える。その呼び名はどうでも……良くはないが、今さらなのでスルーだ。

問題はいつも通りじゃない出来事の方である。

「まさか解放海域で戦艦ル級や夕級に遭遇するとは……」

「それにル級はflagshipだったわ」

「ならば遭遇した海域周辺の調査と巡回の強化をしなければな。何はともあれよく無事に帰ってきてくれた」

「ふん！……アイツがいなきやどうなってたか分からないわよ」

曙がそっぽを向きながら口にした「アイツ」という言葉。ある意味今回のMVPにして、最も頭の痛い悩みの種。

ル級らとの戦闘中に出会った、人間であるにも関わらず艦娘と同じように水の上に浮く少年。その名は……。

「八坂東壱君、だったか」

「本人はそう名乗っているようです。学生手帳も預かっていますが、調べたところ存在しない、架空の学校のものでした」

「つまり偽造だど？」

「そう判断するのが妥当かと」

大淀がそう告げる。まあ普通に考えたらそうだよな……。

彼女の言葉に反論する者はいない。第七駆逐隊の面々が少し気ま  
ずそうな顔をしているのは、彼に恩を感じているからだろう。

「それで八坂君はどうしてる？」

「客室で待機してもらっています。見張りの天龍さんと龍田さんから  
報告はきていないので大人しくしてくれているようですね」

「ふむ……」

彼の処遇をどうしたものか。

まず解放海域とはいえ一般人の立ち入りが禁止されている海域に  
いたこと。これは立派な法律違反だ。

難破の末に漂流していた等の理由ならば罰する必要性はないが、こ  
こ最近一般人が乗った船や民間の船が難破したという事故は発生し  
ていない。

そして身分偽造の恐れがある学生証を有していた。この時点でだ  
いぶ怪しい。厳しく取り調べなければならぬだろう。

他国の工作員ということも考えられる。

で、極めつけだが……。

「機装もなしに、というか人間にも関わらず曳航されながらとはいえ  
水上を航行し、あまつさえ瞬間移動ができる、か。これは本当に事実  
なのか？」

「少なくともアタシは本当だと思ってる。じゃなきゃ一瞬で敵の背後  
を取るなんてできないと思うし」

「瞬間移動とは些か現実的ではありません。何か仕掛けがあるのでは  
？」

「漣達4人を抱えて何度も深海棲艦の後ろを取ったんですよー？おか  
げで好き放題攻撃できたし、あれが手品なら世界中の手品師を雇うこ  
とをオススメします」

喧々諤々、その力を目にした曙達肯定派に、突拍子のない話を聞か  
されただけの不知火達否定派が激しく意見を交わす。そうなるのも  
当然か。助けてもらったという事実と、作り話としか思えない非現実  
がせめぎ合っているのだ。

こりや、この場で結論を出すのは難しいな。

「大淀、八坂君をここに呼んでくれ」

「良いのですか？まだ安全とは言い切れませんが」

「それを確かめるために直接話を聞け。言っておかなければいけないこともあるしな」

色々と怪しい立場の八坂君だが、彼のおかげで第七駆逐の4人は無事だったのだ。彼女達の提督として、まずは礼をしなければいけないからな。

### 第3話

横須賀鎮守府はデカイ軍事施設だった。建物の大きさや人の数は元より、とにかく敷地が広い。東京ドーム何個分だよ。

そして俺が真っ先に案内されたのはシャワールームだった。びしょ濡れですもんね。ありがてえ。おまけに制服はクリーニングに出してくれるという好待遇。

……しかしテンパってて気にしてなかったけど、なんで俺は高校の制服着てたんだ？普通に部屋着だったはずなんだけど。

まあその程度の疑問なんて今さらか。気にするべきことはもっと他にあるし。

シャワーから出て用意されていた服に着替える。白いワイシャツに黒のスラックスという落ち着いた格好だ。

さっぱりしてシャワールームから出ると待ち構えていた天龍さんと龍田さんに客室まで連れて行かれた。お呼びがかかるまで待機ということらしい。

ただ待ってるだけだと手持ちぶさたないのでとりあえず2人に話しかけてみた。やっぱりというか、どちらも艦娘らしい。

そのまましばらく雑談に興じる。艦娘関連の話題は新鮮で面白い。

「なあ東壱」

「なんですか？」

天龍さんは普通に俺を名前で呼ぶ。そこに深い意味はなくて、そういう気質の人なんだろう。

ちなみに俺が敬語なのは2人とも見た感じ俺と同じくらいの年齢だからだ。っていうか軍人相手なんだし畏まるべきだよな。

曙達にも敬語使つとけばよかった。

「お前は本当にオレ達や深海棲艦のこと知らないのか？」

「はい。さつき初めて聞きました」

「それはおかしいのよね。日本に住んでてそんなことも知らないなんてあり得ないんだけど」

まあ俺が住んでた日本とこの日本はたぶん違う国だからなあ。んなこと言ったらどんな反応されるか。妄想癖か虚言癖を疑われておしまいかもしれない。

とはいえ、だ。俺が置かれた状況をしっかりと理解してもらうにはいずれ話すべきなんだろうけど。

どう説明したら一番理解を得られるかな、と考えていると、客室の扉がトントんと叩かれた。

失礼します、という声と共に現れたのはメガネをかけた黒の美女。彼女もまたセーラー服っぽい服装をしていた。

それだけならまあ普通の範疇なんだけど、なぜかスカートの両脇に大きめのスリットが入っている。そのせいで腰骨辺りの肌が露出してしまっていて、率直に言うといかがわしいお店の制服みたいだ。

「八坂さん、お待たせ致しました。提督がお呼びになっていますのでこちらへ」

「はい」

「オレらもついて行っていいか？大淀」

「ええ、別に構いませんよ」

スリットお姉さんの名前は大淀さんというらしい。前方の大淀さん、後方の天龍さんと龍田さんに挟まれながら提督がいる執務室へと案内される。

そこにいたのはおそらく30代前半くらいの、白い軍服をまとった男性。海軍の事情なんて詳しくは知らないけど提督って地位に着くにしてはかなり若い気がする。それだけ優秀な人なんだろう。

ただなんで肩に小人を乗っけてるのか。しかもあの小人動いてるんだけど。

その不思議生物について言及したいが、場の空気にそれは難しい。

「はじめまして、八坂君。僕は横須賀鎮守府で提督を務めている氷川だ」

「八坂東壺です。この度は助けていただきありがとうございます。ごさいます」

「いや、こちらこそ第七駆逐隊……曙達を助けてくれたことにお礼を言わせてもらいたい。本当にありがとう」

そう言って氷川さんは頭を下げた。お手本のようなきれいなお辞儀だった。

こんな偉くてイケメンでしかも性格良さそうな人に頭を下げさせるとか恐縮すぎる！そもそも俺があんなとこにいなきや曙達も逃げ切れてたかもしれないわけで。

「き、気持ちは分かりましたから頭を上げてください！」

「すまないね。ただこれは彼女達の提督として必要なことなんだ」

やだ、氷川さん心までイケメン……！まだ肩に小人乗っかってるけど。

しかしこの部屋人多くない？俺と提督、大淀さん、天龍さんに龍田さん。さらには曙達4人と救援部隊の6人。合計15人の大所帯だ。そんな衆人環視の中でイケメン提督に感謝を示されて頭を下げられる俺。

視線が痛いのは被害妄想だろうか。勘弁してくれえ……。

時間にすれば1分くらいのやり取りだったが、それだけで俺は結構精神を削られた。

「……さて、それでは本題に入ろうか」

氷川さんの雰囲気が変わる。これが提督の威厳ってやつなのか？

椅子に座って多少リラックスするどころか自然と背筋が伸びた。

「はじめに聞いておきたいのは君が海で何をしていたのか、ということだ。八坂君がいたのは一般人の立ち入りが禁止されている海域なんだが」

「え」

思わずすごい声が漏れた。

けど言われてみればあんな化け物が出現する海なんてそりや立ち入り禁止だろう。

つーかこれ説明のしようがなくね？俺だってなんであそこにいたのか分かってないんだし……。

「その反応だとあそこが立ち入り禁止の海域だとは知らなかったのか

い？」

「……はい。すみませんでした」

「君は艦娘や深海棲艦について全く知らないと報告がきている。ならば海域について無知なのも分からないでもない。だがそれを知らずともあそこにはいた理由はあるだろうか？」

「ないです。マジでないんです。そう言えたならどれだけ楽なことか。」

「今この状況で目的も理由もないとか口にしたらふざけんなと怒られることくらい俺にも分かる。」

「いやまあ観念して怒られろってことなのかもしれないが……。」

「ため息を吐いて天井を仰ぐ。」

「……どうしよ？ただの高校生にすぎない俺が、海千山千の相手をしてるような提督を口先で誤魔化すなんてできるとは思えない。」

「これはもう開き直るしかねえかなあ……。」

八坂君が、ふー……と息を吐いた。そしてしばし虚空を見つめたかと思うと、次の瞬間に僕と視線がぶつかる。

さつきまでの狼狽していた目とは違う。落ち着いた、深い瞳だ。

「まず最初に分かっておいてもらいたいことがあります」

特別大きな声でも威圧するような声でもないのに、どこか有無を言わせない迫力があつた。

彼から放たれるプレッシャーに知らず知らずに冷たい汗が流れそうになる。

「……何かな？」

「正直に言つて、俺も自分の身に何が起こつているのか把握できていません。その上俺の憶測が正しければ、氷川さんにとっては到底信じられない話になると思います」

ただ、と八坂君は淡々と言葉を続ける。

「それはふざけているわけでも誤魔化そうというわけでもありません。求められれば俺にできる限りの証明も協力も惜しまないことを約束します。だからどうか、これからお話しすることを虚言だと決めつけないでもらいたいです」

「……分かった。君が話すことを軽視しないと誓おう」

「ありがとうございます。それでは早速ですが今回の大前提について」

八坂君はゆっくりと息を吸い込み、それを一瞬止める。

そして溜めた息と一緒にこんな言葉を吐き出した。

——おそらく俺はこの世界の人間じゃありません。

「……それはどういう意味かな？」

「言葉の通りです。パラレルワールドとでも言えば理解してもらえますか？」

「そういう概念自体はね。ただそれはSFの映画や小説、言つてしま



えば創作物の中でしたか聞いたことがない」

「……俺も今日まではそうでした」

力なく、ぼつりとそう呟く。それから彼は自分の身に起きたことを、彼自身が理解している範囲で語り出した。

本来の自分はこの世界とは違う日本で生きていたこと。

それが気が付けばいきなり海の上で途方に暮れていたこと。

そんな時に曙達と出会ったこと。

だから艦娘や深海棲艦といった、元の世界の日本には存在しなかったものについての知識が一切ないこと。

……はつきり言って無茶苦茶だ。これを信じろ、というのがムリな話だろう。

確かに艦娘に関する知識がないことや、こちらの世界では架空となる学校の学生証を持っていたことの説明にはなるが……。

「なるほど。君が最初に断りを入れた理由は分かった」

「はい。とても信じてもらえるような内容じゃないのは俺も理解しています」

「それでも打ち明けたということは違う世界の人間だという確たる証拠でもあるのかい？」

「いいえ、ありません。むしろ現状では俺が違う世界の人間だと証明するのは難しいと思います」

八坂君は臆することなく言い切る。

「ただ証明……というか、それが真実だという可能性を提示することはできるかもしれません」

証明か。八坂君が異なる日本からの来訪者だという証拠があるとすればやはり報告にあったレポート能力だろうか？

少なくともこの世界にそんなものは現実に存在しない。可能性を提示するというのも間違った言葉ではないだろう。

「どうやってかな？」

「氷川さんは俺が瞬間移動したというのは聞いてますよね？」

「ああ。その力を見せてくれるのかい？」

「望まれれば。なんなら今からでも構いませんが……」

八坂君が横目でちらつと窓の外を見る。すでに太陽は半分ほど水平線に隠れていた。

日没まではずぐだ。能力については気になるが実演は明日以降に回した方が賢明だろう。

「いや、それは後日にしよう」

「後日……つまりそれまで鎮守府に置いてもらえるってことですか？」

「ああ。まあ当然ながら自由は制限させてもらうことになるが」

「構いません。正直、追い出されるか問答無用で牢屋に放り込まれても文句言えなくらい怪しい自覚があるので……」

「じゃあなんで違う世界の人間だなんて余計怪しまれるようなこと言ったのよ……」

我慢できずに、といった感じで曙がこの場にいた全員の心境を代弁する。

突っ込まれた八坂君は苦笑を浮かべながら頭をかいた。気が付けばさつきまであつた威圧感は消えている。

「いやー、ウソをついたところで誤魔化しきれないと思って。だったら素直に白状した方が身のためになりそうだし」

「正直者はバカを見るって言葉を知らないわけ？」

「あ、曙ちゃん……」

容赦ない曙を潮が制止する。この鎮守府ではよく目にする光景だ。

しかし八坂君は曙の言葉を受けても動じた様子はないな。大抵の提督は曙に開口一番罵倒されてダメージを負う、というのが通例なんだが。

「ああ、そうだ。それから俺が使った能力について補足があります」

「聞かせてもらおう」

「ええつとですね、実は瞬間移動なんてことができるようになったのはついさつきなので、この力がなんなのかというのはさっぱり分かりません」

「ついさつき……」

「はい。俺がいた世界でも瞬間移動は空想の世界の産物であって、現

実的な力じゃありません」

「ふむ……」

八坂君の説明を聞いてしばし考える。彼の話が本当ならこちらの世界に来て目覚めたか、元の世界で目覚めた結果その力でこちら側にやってきてしまったのかもしれない。まあ距離どころか世界を飛び越えるなら、それはテレポートではなくワープの類いなような気がするが……。

まあ何にせよ、保護の名目で監視しつつ、まずは身元の調査を進めよう。いくらなんでも異世界から来たという話を最初から真に受けて調べないわけにもいかないからな。

それで何かしらの情報が掴めればいい。

「だいたい分かったよ。優先的に聞きたかったことは一通り聞いたし今日はこんなところかな。八坂君からは何かあるかい？」

正直聞きたいことはまだ山のようにあるが、あまり踏み込んで悪い印象を与えたくもない。詳細不明で強力な力を持っている相手なのだから、可能な限り友好的にいくべきだろう。

そのために今度は八坂君の方からも質問がないか水を向ける。

「あー……これまでの話と関係ないことなんですけど、ひとつだけ」「なんだい？」

おそろおそろといった様子で八坂君は僕を指差す。

……いや、僕じゃない。僕の背後だ。後ろには秘書艦の大淀が立っているだけだが。

そう思っていると、八坂君は今日1番の衝撃を僕達に与える言葉を口にした。

「あの、さっきから氷川さんの肩に乗ってる小人は何ですか？つていうか動いてますけど生きてるんですかね？」

その瞬間、執務室の空気が凍った。

「き、君は妖精さんが見えるのか!？」

「は？妖精さん？え、その小人が？」

「そうだ！」

「ええ、見えてますけど……うわ、なんだよ、登ってくるなって！つー

かどつから現れた!」

隠れて様子を見守っていた妖精さんが、自分達を認識できていると分かった途端八坂君に群がってよじ登っていく。

中々目にできない光景の前に、僕と艦娘のみんなが呆然とする。だが事態はそれに留まらなかった。

「は？工廠妖精？それがお前らの名前なのか？一括りの時点で名前じゃないだろ……あ、ああ、俺は八坂東壺だけど。いや、艦娘じゃないって。どう見ても男だろ俺は」

八坂君が独り言を言い始めた。僕にはそうとしか聞こえないが、妖精さんと会話しているというのは明らかだ。

この時点で彼が他国の工作員であるという可能性はほぼあり得ないというレベルまで下がる。どんな理由があろうとこんな希少な人材を単独で、しかも深海棲艦に襲われる可能性のある危険な場所から、かなり不確定な方法で潜入させるわけがない。

「君は妖精さんの言葉が分かるのか!」

「え？まあ、はい」

事の重大さを理解してないらしい八坂君は平然と頷く。

もし彼が本当に妖精さんの言葉が理解できているという裏が取れば今後の方針も変わってくる。

「——大淀、彼女を呼んでおいてくれ」

「畏まりました」

それだけで大淀には伝わったのだろう。音も立てずにスツと執務室から姿を消した。

妖精さんの言葉を理解できる人間または艦娘というのは数が著しく少ない。現在日本海軍で確認できているのはわずか4名で、その内人間は呉鎮守府の大將のみ、といえはいかに希少な人材か分かってもらえらるだろう。

そしてここ横須賀鎮守府にも1人だけ妖精さんの言葉を解する者がいる。それが判明してから轟沈を避けるため、戦闘はおろか遠征、演習さえも禁止にされた艦娘が。

その、彼女の名前は——。

## 第4話

俺が小人改め工廠妖精と会話できることが発覚して一時場が騒然となったが、なんかまずかったのだろうか？ 図らずもパー○ルタ○グをしゃべった時のハ○ー・ポツ○ーみたいにな空気になったんだけど……。

まあいいか。気を取り直してやるべきことをやるとしよう。

今俺が立っているのは屋外の訓練場だ。提督らや憲兵、そして艦娘も近接戦闘や体力トレーニングの際に利用するらしい。

艦娘は船なのに格闘戦もこなすのか……。擬人化したからこそその戦い方だな。

その訓練場の床はコンクリート製なので多少濡れたり燃えたりしても大丈夫そうだ。てなわけで早速はじめよう。

時刻はすでに夜の8時。当然日は落ち、本来なら使用時間が過ぎている訓練場を特別に使わせてもらえることになった。

なんでこんな急なのかって？ いち早く答えを確かめるために決まってるだろ。

ちなみに監視役だろう天龍さんと龍田さんも一緒だ。そして見学希望の曙達4人の姿もある。

人の目は多いが気にしないようにしよう。

「それでこれから何をするんだ？」

「うーん、そうですね……」

「決まってるなら話にあったレポートってのを最初に見せてくれよ！ ずっと気になってんだ！」

監視役とは思えないウキウキ顔で天龍さんが詰め寄ってくる。龍田さんは「あらあら、天龍ちゃんったら」とか言って笑ってるだけで止める素振りはない。

ただ、ある確認が取れない以上レポートはあんまり使いたくないんだよなあ。

その確認っていうのは技の使用回数についてだ。

もし俺が使っているテレポートがポケモン仕様のものならPPが存在する。テレポートのPPは20。今日すでに5回使っているから残りは15回だ。

ゲームならポケセンやアイテムで回復できるが、この世界ではどうなるか分からない。ましてや俺はポケモンじゃなくて人間だしな。

自然回復するにしてもその回復率はどうか。一晩寝れば満タンかもしれないし、1しか回復しないかもしれない。そもそも回復しない、使いきりつてことも考えられる。

その辺の細かい確認が取れてない状況でムダ打ちするのは避けたい。もしポケモンの技じゃなかったとしたら使用上限のボーダーが全く分からなくなっちゃうしな。

「テレポートは明日のお楽しみってことで。その代わり色々試してみますからそれで満足してください」

そう言つて、俺は訓練場の設備のひとつである巻き藁を並べる。訓練場の中央部分に等間隔で並ぶ10本の巻き藁。

対して訓練場の端に立った俺は、息を吐いて体の力を抜く。

そして心の中でこう呟いた。

——こうそくいどう。

バトル中に、自分の素早さをグリーンと上げる技。これが発動すれば俺の能力がポケモンのものだとほぼ確定したと考えてもいいだろう。

結果から言うと、俺の仮説は正しかった。

技の名前を唱えると体が軽くなる。まるで体重や重力が軽くなったような感覚。今なら100メートル走で世界新とか出せそうだ。これは発動したとみていい。

こうそくいどうは重ねがけもできるがまずはこの1回でどれだけの効果があるのかを確認しよう。

足に力を込めて巻き藁の方へ駆け出す。感覚的には2歩ほど進んだ程度。

だがもう俺の目の前には巻き藁があった。たった1回の使用でこれとは効果高すぎでしょ。

さすがすばやさ2段階アップ技！世界新どころの騒ぎじゃなかつ

た。

感動しつつも間髪入れずに今度は「あいぎり」を3回くり出す。刀なんて持ってないから手刀だ。

それでも巻き藁は切り刻まれ、完全に切断された。巻き藁だった部分が3つに別れて床に転がっている。あいぎりが使えてる。

これはもう『俺の能力Ⅱポケモンの技』で確定だろ。

ちなみにまずこうそくいどうを使えるか試したのは自分の回避性を上げたいからだ。深海棲艦なんて危ないもんが蔓延ってる世界じやいつ襲われるか分かったもんじやないしな。

とにかく使えることが判明してひと安心である。その内「まもる」や「みがわり」なんかも試しておきたいところだ。

で、次にあいぎりを試した理由としては、無意識にだが最初に使っていたであろうなみのりと同じ秘伝技なら使えるんじゃないかと考えたからだ。そして方が一PPが切れて回復できなくなったとしてもダメージが少ない。

ゲームの仕様上ではあいぎりが使えないと進めない場面もあるが、現実なら避けたりなんだりで突破することは可能だ。

自分の「こうげき」のステータスがどうかは知らないが、どうせ威力50の物理技だ。大したダメージソースにはならない。

確認目標のひとつとしてあいぎりのPPを使いきり、明日の朝までにどれだけ回復しているか確かめる、というのを追加する。

これで一生いあいぎりが使えなくなったとしても死にはしないしな。

ついでにこうそくいどうの重ねがけの効果も調べてみる。

その後さらにこうそくいどうを2回使い、アホみたいに加速しながら残り9本の巻き藁を全ていあいぎり3回ずつでぶった切った。

最後にもう1回使おうとしたが、いあいぎりは発動しなかった。これで明日以降どう回復するかで技を使用する優先度を決める必要があるな……。

「ふう……とりあえず悪くないかな」

「悪くないってレベルかよ！」

うお、ビツクリした……。いきなり大声上げるなよ。

やれやれと思いなながら天龍さん達の方へ振り返る。天龍さんは瞳をキラキラと輝かせ、それ以外の5人はポカンとしていた。温度差がすごい。

「今のはテレポートじゃないのか!？」

「違います。ただ高速で移動して切っただけですから」

「そーいやそれもだよ！お前の手はどうなってんだ!？」

盛り上がり方がすごいこの人。よく見れば腰に日本刀らしきものを下げてるし、剣の道を歩んでそうな天龍さんには興味深いものに見えたのかもしれない。

10本切り落とすのに20秒もかからなかったからな。

「あはは……。まあ詳しい話はまたあとで」

時間が惜しいのですぐさま次の検証に入る。

最初より強くなった視線が背後から飛んできてるのを感じながら、俺は右手を払うように横へ振った。

するとそれに合わせてこぶし大より2回りほど大きな火球が表れて、巻き藁の残骸の方へ飛んでいく。

それは残骸に直撃すると瞬く間に燃え上がり、焼き尽くす。

“ひのこ”でこの威力である。そして命中率100だからなのか、素人の俺が全弾的中させられるとは。

とか考えてる内に巻き藁から煙が立ち上ぼっていた。これは目立つし焦げ臭い臭いが鼻にもつくな。

さっさと消そうと今度は“あまごい”を試してみる。普通に雨が降り出した。

ヤバい……。ヤバくない？これでPP自然回復なら日本はおろか世界の中から引つ張りだこだろうな。

とりあえずこれで煙を目立たなくしてからの――

“みずでつぽう” “あわ” “バブルこうせん” “みずのはどう”

“うずしお”と立て続けに水タイプの、それでいて危険がないような威力60以下の技を放つ。意外にも全部使えた。

そしてあつという間に鎮火完了。鎮守府を追い出されても消防士



として生きていけるかもしれない……あ、戸籍ないからムリか。

「うわあ、すごい……魔法みたいです！」

「やっぱりあの人チートですよ、チート」

「でも威力ならアタシ達の主砲の方が上だと思う」

「火力を艦娘と比較されてる時点でおかしいでしょ……」

曙達の会話が聞こえてくる。潮はいい子だなあ。

しかしこんなんでチートだのなんだのと言われても、これで高火力技を見せたらどうなるんだろうか。たぶん人外扱いされそう。

最後は“ねんりき”で炭と化した残骸を片付ける。“サイコキネシス”とか使ったら相手を圧縮して砕き潰すとかできんのかな、とか物騒なことを考えていると今度は龍田さんが声をかけてきた。

「今のは全部、貴方の言っていたポケモンの技なのかしら？」

「はい。まあほんの一部ですけど」

「一部ねえ。技の数はどれくらいあるんだ？」

「えーと……正確な数は分からないですけど、たぶん600種類くらいはあると思います」

『600!?!』

俺を除いた全員の声が重なる。そのどれもが驚きに満ちたものだった。

……ああ、考えてみればそうだよな。ポケモンに慣れ親しんでるから当たり前の感覚だけど、技の種類が600って相当多いか。廃人はそれらの効果や威力をほとんど覚えてるってんだから頭おかしい。

捕まえて育てこそすれ、厳選なんてしたことのない俺みたいなヌルゲーマーからしたら信じられない所業だ。

「もしかしてそれ全部使えるのか？」

「それは分かりません。その内確かめてみたいですけど威力が高くて危険なものや条件を揃えないと使えないものとかありますから……」

ポケモンの技が使えるようになったとはいえ高火力の技まで扱えるかはまだ分からんし。

確かめようにもここで“りゅうせいぐん”とか使ったらシヤレにならないからね。落ちてくる隕石の規模によっては人類滅亡もあり

える。

ゲームじゃポケモンは死なないし建物やフィールドが破壊されることはないけど、あれがリアルに反映されたら間違いなく被害が出るだろ。

あとはZ技とかどうなんだろうな。ZリングもZクリスタルもないからさすがに難しいか？

まあまずはその前にメイン火力になる技を調べたいところだ。Pの回復が望めない場合は使える回数がかなり限られる。

明日いあいぎりが使えるようになってるかどうかで今後の方針を決めよう。回復なしだとお披露目はかなり地味になっちゃうけど……。

「とりあえず今日は終わりにします」

「あれ、もういいの？」

確かめたいことの事前準備はできたからな。

もっと強力な技については提督に許可をもらってから、被害が出ないだろう海上とかで試すことにしよう。

「雨が降ってきたちやいましたから。これで風邪引いて本番で力が発揮できなくなったら本末転倒ですし」

雨降ってきたのは俺のせいだけ。つかこれ、いつまで降るんだろ？

バトルなら5ターン経過すれば止むけど現実の時間はどれだけ必要なのやら。明日まで続いた場合は“にほんばれ”でも使って強制的に晴れさすかな。

天気予報士にとつては天敵だな、俺。むしろ天気予報士になれるかも……あ、戸籍ないからムリか。

「おや、もう終わりか？せつかく見に来たんだが拍子抜けのようだ」  
ふとそんな声が聞こえた。振り向けば、そこにいたのは傘をさした少女。長い黒髪にセーラー服姿で、特徴的なのは左右で長さの違う靴下をはいているところだ。

ハイソックスとニーソックスか？見てると落ち着かないはき心地なんじゃないかと思ってしまうが、あれもファッションってやつ？

「えつと……あ、俺は八坂東壱です」

「陽炎型駆逐艦の12番艦、磯風だ。よろしく頼む」

なかなか堅いしゃべり方をする子だった。ただどこかミステリアスな雰囲気とは合っていて、なんというか風格みたいなものがある。

セーラー服よりも着物とか巫女服が似合いそう。

「陽炎型ってことは陽炎さんの姉妹艦？」

「ああ。姉達から貴方のことを聞いて会いにきた。なんでもこの磯風と同じ力を持っているらしい、とな」

同じ力？まさかポケモンの技が使えるってことはないだろうし……。

なんて考えていると、磯風さんの肩に乗っている妖精が目に入った。

「もしかして妖精と話せる力のこと？」

「そうだ」

『ヨロシク』

磯風さんの肩に乗った妖精がフリフリと手を振ってくれる。

なんとも可愛らしいが、さっきの妖精とは見た目が違うな。ヘルメット被ってないし。

「ああ、よろしく。君も工廠妖精？」

『チガウ』

「違うのか」

「この子は装備妖精と言ってな。艦娘の艤装と一心同体の存在なんだ」

一心同体……付喪神つくもがみみたいなもんだらうか？

そう考えると受け入れやすいような気がする。まあ艦娘自体も相当非常識だし今さらか。

「つと、雨の中で立ち話もなんだ。少し移動しよう」

「どこにですか？」

「工廠さ」

入るといい、と勧められるままに磯風さんのさしていた傘に入れて

もらう。もちろん傘を持つのは俺だし、磯風さんが濡れないよう傘を少し右側に傾けながら歩く。

曙達はもう艦娘専用の寮に戻っていった。天龍さんと龍田さんも右に同じ。

あの2人監視役じゃなかったの？それとも磯風さんがいれば事足りるってことなのだろうか？

「しかし本当に妖精さんと話せるとは驚いたぞ」

妖精も磯風さんの言葉にウンウンと頷いている。

「正直に言わせてもらおうと虚偽かと思っていた」

「虚偽って……」

「すまない。だがそれくらい珍しい力なんだ」

「そうなの、なんですか？」

「敬語が苦手なら崩してもらって構わないが」

「……ありがとう」

ならお言葉に甘えて磯風と呼ばせてもらおう。

悪気はないんだが磯風や曙達みたいな明らかに年下という子を前にすると、気を抜いた瞬間に敬語が崩れてしまう。

天龍さん達くらい年が近い見た目になると敬語も違和感なく使えるんだけどな。

「いいさ。その方がこちらとしても楽だ」

「その割りにはしゃべり方が堅いような」

「これが普段通りなんだ」

磯風と雑談しながら鎮守府内を歩く。やがて大きな鉄製の扉がついている建物に到着した。ここが工廠か。

工廠の扉は半分開いていた。そこから中に入ると数人……数体の妖精さんがいた。

何やら艦装と呼ばれている機械に群がっている。

「あの妖精は何してんの？」

「艦装の修理と調整さ」

「え？妖精ってそんなことできんの？」

「ああ。艦娘だって妖精さんが建造する。言わば全ての艦娘の母と呼

んでも間違いではないだろう」

「マジかよ……」

磯風の肩の上では装備妖精がえっへんと胸を張っている。この小さな体でそんなすごいことができるのか……。

もしかすると艦娘以上に不思議な存在かもしれない。

磯風はそんな妖精を優しく手のひらに乗せ、そのままズラリと並べられている艦装の上に置いた。

「ではまたな」

『マタネ』

「えっと、ばいばい?」

『バイバイ』

そう言うと、装備妖精は艦装の中に消えていった。

……そうとしか表現できない。どういう原理だとか理屈だとか知ったこっちゃねえ。

「この艦装があの子の家?なのか?」

「そうだ。……いつまで経っても綺麗なままの、な」

「磯風?」

不意に磯風の声のトーンが落ちる。元々落ち着いているから変化が分かりにくいだが、これは気落ちしてる……のか?」

「なんでもない。お、どうやら雨は止んだようだぞ」

「あ、本当だ」

工廠の外に出るといつの間やら雨は上がり、雲も晴れて月が出ていた。

あまごいの効果は30分ってところか。短いのか長いのか微妙なところだ。でも続けて使えば田畑を潤すには充分か。

鎮守府を追い出されても農家としてry

「八坂」

「なに?」

「お前がここにきてくれたことを嬉しく思う」

「藪から棒になんだよ」

「言わせてくれ。同じ力を持った者と会えたのが嬉しいんだ」

「……そうか。まあ俺がここに居られるかどうかはまだ決まったわけじゃないんだけど」

認められなきゃ俺はどうなんだろう？ 処刑や拷問にかけられるってことはないと思いたい。

しかし認められたら認められたで俺も深海棲艦と戦うことになるかもしれないし、そういう覚悟もしておこう。

「それなら心配はいらないだろう。海軍としても手放したくない人材のはずだ」

「ポケモンの力が？ それとも妖精と話せる力？」

「さて、どうだろうな？ まあどちらもだ、と言わせてもらおうか」

「意味深だなあ……」

まあいいさ。なにせよ、生きるためには自分の価値を証明するしかないんだ。

そのために利用できるものは全部利用するぞ。改めてそう意気込む。

そんな俺の横で月明かりを浴びる磯風の表情は幻想的であり、そしてなぜか少しだけ悲し気に見えた……ような気がした。

## 第5話

異世界生活、2日目。

まあ異世界といっても基本的には日本なので文化的に大きな違いがあるわけじゃないが。昨日の夜に食べたカレーは美味しかったし、与えられた部屋は普遍的な洋間だった。

そんな部屋で朝を迎えた俺は、窓から差し込む柔らかな日差しを浴びながら歓喜の声を上げ……そうになるのをすんでのところでは堪える。

朝もはよから奇声を上げて騒ぎを起こすのもあれだからな。

しかしこんなテンションになるのも仕方ない。今俺の目の前にあるのは真つ二つにされたメモ用紙。

それをさらに4分割して確信を得る。

——「あいぎり」が使える！

そう、昨日使いきつたあいぎりのPPが回復しているのだ。

もったいないがメモ用紙をひたすら裁断し続ける。今日も使用回数が30回を数えたところで使用不能になった。

全回復だ。これが全ての技に適用されるならPPの問題はほぼ解決したと言つていい。

これなら技の実演は出し惜しみしないでやれる。

ここで俺の有用性を示して鎮守府……海軍の後ろ楯を得るぞ！

——なんて思っていた時期が俺にもありました。

すいません調子乗りました。後ろ楯とか打算的なこと考えた罰かこれは。

氷川さんとの話し合いから数日。軟禁生活の最中に行われた身体検査や軽い尋問みたいなものを経て、ついに訪れた本番当日。俺は置かれた状況に頭を抱えたくなっていた。

いやまあ冷静に考えれば当然というかなんというか。

こんなデカい鎮守府をたった1人の提督で運営してるとかあり得ないし、俺みたいな得体の知れない男の能力を検証する機会を他の提

督が視察するのも危機管理的に至極当然のことだった。

鎮守府内にある、船舶が停泊するための港湾。その岸壁に立って風を眺める水面を眺める。

風もほとんどないから海に出るには適した環境だ。

「さて、準備はいいかい？八坂君」

「……はい」

嘘である。氷川さんだけならともかく、もつと年配で山ほど死線を潜ってそうな厳ついオッサンが物見櫓ものみやぐら……というか馬鹿デカイ艦橋みたいなところに雁首揃えているのを見て「行けます！」とか気軽に言えるほど能天気じゃないんだよ。

けどだからといって歴戦の戦士みたいな顔をしたおっかないオッサンらをお待たせするような度胸もない。

「そんなに緊張しなくても大丈夫だ。ある程度指示は出すからそれにしたがってくれればいい」

「分かりました」

まあどうせここまできたらやるしかない。それに昨日だって深海棲艦に遭遇して割りと命の危機に瀕したじゃんか。

あれと比べたらこれくらい大したことない気がしなくもないし。

「じゃあこれをつけてくれ」

氷川さんから手渡されたのは通信用に使う肩耳タイプのヘッドセット。それを言われるがままに装着する。

これで指示を出してくれるのか。

「では僕も大元帥のところに戻る。天龍、龍田、八坂君の先導を頼むぞ」

「おうよ、まかせとけ！」

すでに海に出ている2人は昨日から引き続き俺の世話役みたいなことをしてくれるらしい。龍田さんはつかみどころがなくよく分からないけど、天龍さんは単にポケモンの技を見るの楽しみにしてるだけだよな。

待ちきれないって顔してる。

そう思いつつも言葉にはすることなく、俺は岸壁から飛んで水面に



立つ。

こうなったら開き直りだ。気合い入れて頑張りますか！

八坂君が海の上に立つと他の提督からどよめきが起こった。まあ僕も内心は同じようなものだったけど。

聞くのと見るのじゃ大違いだ。

『……艤装もないのにマジで海の上に立てるのか』

『本当に不思議ねえ。確か波乗りって言ったかしら？』

『はい。これがあれば海や川といった水上を移動することができま  
す』

ヘッドセットのマイクを通して3人の会話がこちらに届く。こちらの気なんて知ったことじゃない、とばかりにとんでもないことをさらっと言ってくれる。

さて、今日はこれからどれだけ驚かされることになるのか……。

「天龍、龍田。八坂君を先導し予定地点までの航行を開始せよ」

『こちら旗艦天龍、了解したぜ』

僕の指示に従って天龍達が沖に向かう。目的地は演習海域だから到着まで時間はそうかからないだろう。

八坂君は天龍と龍田に挟まれる形で、特に問題もなく航行してい

る。

八坂東壱という少年は未知数だ。正直、僕の手には余る存在と云っていい。

なので刺激しないよう彼の言い分をある程度認めながら監視役をつけ、その間に上の人間と協議した。そして迎えた彼を見極めるための機会。

と言っても彼をどうするかなんてすでに決まってしまったようなものだけだ。

海の上に立ち、1度訪れた場所にはテレポートできる。それだけで指揮と戦線を繋ぐことが可能だし、人や物を一緒に運べるのだからその上限によつては移動・輸送の負担が劇的に改善される。

おまけに磯風に確認してもらい妖精さんの言葉まで理解できる能力が本物であることが確認された。

妖精さんとコミュニケーションが取れる。それだけで建造や開発の成功率が上昇するのだ。

沈めても沈めても湧いてくる深海棲艦との戦争で消耗戦を強いられている人類からすれば、狙った艦娘の建造や必要な装備の開発成功率が上がるというのは戦線の押し上げに多大な影響を与える。

……だがそれ故に、八坂君はもう逃げられない。

確かに身元不明で不可思議な能力を使う少年だが、結局のところただ1人の人間だ。目立たず侵入したならまだしもこうまで存在が明けて透けでは監視の目を掻い潜つての内部工作などまずムリだろう。

八坂君の行動を鎮守府全体で目を光らせながら、その上で彼の能力を運用した方がメリツトは大きい。

……大元帥含め、上層部は判断している。

問題は、その思想も一枚岩の元ではないということだが。この横須賀鎮守府にも派閥というものが存在する。

今回、八坂君をより高く評価して自分の手駒に加えることができれば戦果も向上し発言力・影響力を高めよう。

深海棲艦との戦いに心身を削りながら、派閥争いにも気を配らなければいけない。人間の醜悪さというものが浮き彫りになっているな

……。

そんな気が滅入りそうなことを考えている内に3人が目的地に到着した。普段なら艦隊同士の演習に使用されている海域だ。

鎮守府からだと言遠設備を用いても監視は厳しいので、飛ばしている映像記録用の艦載機から届いた映像をリアルタイムで観覧艦橋に写し出す。

『こちら天龍。指定されてる場所に到着したぜ』

『よろしい。八坂君、海上に浮いている標的が見えるかい？』

『ブイから生えて揺れてるやつですよね？』

『そうだ。まずはこの間訓練場でやっていたようにあれを狙って攻撃をしてほしい』

『近距離と遠距離、どちらですか？』

『なら遠距離での攻撃を行ってもらおう』

『了解しました。あ、天龍さんと龍田さんはちょっと離れて見て下さい』

『何でだよ？危ない技でも使うつもりか？』

『この間より強力な技を使いますから。出せるかどうか分からないレベルなので念のために』

万が一制御を誤った時のためだろう。

八坂君は天龍達を遠ざけてから改めて標的と向かい合う。

『そんな不確定な技を使用して大丈夫なのか？』

『平気です。不発なら残念、暴発しても死ぬなんてことにはなりませんよ』

八坂君の声に気負いの色はない。その言葉に嘘はないのだろう。

他の提督達も資料でしか目にしていない彼の能力を一目でも早く見たいのか、反対の声を上げる者はいなかった。

『そうか。ならば最初は君の判断に任せる』

『ありがとうございます』

八坂君はそこで一旦会話の流れを切ると、小さく息を吐いてからその言葉を口にした。

僕の、そして他の提督達の耳にもこう聞こえただろう。

ハイドロポンプ、と。

次の瞬間、まるで滝壺に叩きつけられる水流のような轟音と共に、直径2メートルはあろうかという巨大な水柱が、前に突き出された八坂君の右手の先からとてつもない勢いで噴出される。

かなりの水量であるはずのそれは、どういうわけか水面とは平行して突き進み標的に直撃……いや、飲み込んだという表現の方が正しいだろう。

暴力的な水流が通りすぎた後、そこにあつたはずの標的はブイごとどこかに消し飛んでいた。

当たり前だ。あんな威力の、しかも弾丸とは違い継続性のあるダメージを与えられて耐えられる仕様ではない。

誰しも……そう、誰しもがだ。

僕も、他の提督も、大元帥さえもその馬鹿げた威力の攻撃にしばし声を失う。そんな短い沈黙を破るように、八坂君の声が響く。

『……とりあえず使えはするのか』

何気ない呟き。だがそこに込められた意味は聞き逃すことなど出来ない。

“とりあえず” “使えはする”

その言葉の意味するところは明確な不満。拍子抜けとも言えるかもしれない。

少なくとも彼の世界にいるというポケモンが使うハイドロポンプは“この程度ではない”という真意がありありと伝わる一言だった。

「八坂君、今使った技の説明をしてもらえるかい？」

『今のはハイドロポンプという、水タイプの攻撃技です。反動が存在しない水タイプの技の中では最大火力を誇ります』

「反動が存在しない、というのは？」

『ポケモンの技、特に威力の高い技には使うとしばらく動けなくなったり、体にダメージを受けるものがあるんです』

「裏を返せばハイドロポンプはデメリットなく使えるということか？」

『デメリットがないわけじゃありません。まずこの技は1日に5回が

限界です』

5回が限界、か。少ないように思ってしまうが、八坂君が人間の身であるということ忘れてはならない。

艦娘ならまだしも人間の体でポケモンなる生き物の技を行使しようとするれば負担も大きいのだろう。

『それと命中率もあまり高くありませんね』

「確率的にはどれくらいだ？」

『80パーセントくらいしかありません』

「は、80パーセント……8割だ?!？」

申し訳なきような八坂君の声とは対照的に、静観していた提督達がついに我慢ならず大きな声を上げた。

それがなければ僕が似たような声を出していただろう。事実、今の僕の頬は引きつっている。

対象との距離や視界の状態、対象が攻撃か回避かどうかの行動を取るかなどによって左右されるが、艦娘の主砲の命中率はその半分以下だ。

艦娘は人形となったことで軍艦時代よりも最大射程が短くなり、深海棲艦との戦いは近接戦闘が主である。それでも命中率は平均して3割にも届いていない。

練度が高く、経験と実力を兼ね備えた艦娘でさえ4割を越えることはない。

その中であれだけの威力の攻撃を8割の確率で当てられる。驚異であり、脅威である。

そうとしか言いようがない。

しかもそれをもってして、彼は尚「命中率が低い」と言い切った。戦線と指令部の繋ぎ役？移動・輸送の負担軽減？

それどころではない。彼の能力を十全に発揮できればどれほどの戦果を期待できるのか……。

その皮算用をしているのは僕だけじゃないだろう。むしろ一部の、反大元帥派と噂のある提督にとってはこれほど都合のいい存在はない。

自称異世界の人間。この世界では戸籍も他人との繋がりも持たず、  
「死んでも表沙汰にならない」人間。

……いや、彼を人間と見る者がどれだけいるか。艦娘をただの兵器だと主張する提督が存在する中で、異世界からきた異能を使える少年を兵器として、自分の利権や派閥の争いのために使い潰す光景が目に見えよう。

これ以上その力を見せつけなければその流れは加速していくだろう。それを分かっているながら、僕はこの品評会を続けなければならぬ。

「それで命中率が低いということは高火力でかつ命中率の高い技が存在する？」

『はい。そうですね、多少威力は落ちますけど……』

言いつつ先程と同じように突き出した右手から今度は火炎が放たれた。

その炎は標的を包み込むとあっという間に燃やし尽くす。確かに物理的な威力はハイドロポンプには劣るかもしれないが、これが深海棲艦に燃え移れば瞬く間に延焼し誘爆させられるかもしれない。

『これは「かえんほうしゃ」といって、見た通り炎タイプの技です。何らかの妨害でもない限り命中率はほぼ100パーセントと考えてもらえれば』

あちこちから「素晴らしい」「鎮守府に迎え入れるべきだ」という声がかかる。白々しい反応というか、予定調和だ。

予想外だったのは八坂君の戦闘能力の高さだが、それも彼らにとっては嬉しい誤算に過ぎない。完全にメリツトがデメリツトを上回っているのだろう。

しかし、これは本当に八坂君が異世界の人間だと認めるしかないかもしれない。

タネと仕掛けでなんとかなる手品の域ではないだろう。

「それでは次に……」

『ちよつと待った提督！電探に感有り！』

天龍から予想だにしていなかった報告が入る。「演習海域で深海棲

艦だど?」「巡視艦は何をしている?」「などといった声もするが、それに構っている暇はない。

「深海棲艦か?艦種と数は?」

『数は駆逐艦1、軽巡洋艦1、重巡洋艦2の4隻だ。重巡洋艦は2隻ともflagshipだな』

『どうして敵がこんなところにいるのかしら?』

『さあな。知らねえけど、さっさと倒しちまおうぜ』

「待て!」

彼女達なら勝てるだろうという信頼感はある。だがその場には八坂君いるのだ。

不用意に戦闘に巻き込むのは危険だ。確かに彼の能力は圧巻だが、それが深海棲艦に通用すると決まったわけでは……。

そこまで考えて思い至る。

そうか、これはそういうことか。目的に見当はついたが、誰だ?

……いや、今は捨て置け。最優先は深海棲艦への対応だ。

誰の仕業かは不明だが、これは暗に八坂君を戦わせろという圧力だ。その上で指揮を執る僕に対して彼が死ねば責任を取らせようという魂胆もあるかもしれない。

八坂君の能力の真偽はさておき、妖精さんと会話できる力は真実だ。それを失ったとなれば……。

「天龍、龍田、そして……八坂君。緊急事態だ、敵を沈めてくれ」

『おいおい提督!東壺も出すのかよ!』

『しっかりと準備を整えてからの方がいいんじゃないかしら?』

2人の言い分は最もだ。僕も自分しかいなければ八坂君を戦線に送り出すことはしないだろう。

「……これは命令だ」

だが、僕はそう言わなければならない。僕も結局は組織の中で生きる、汚れた歯車のひとつに過ぎない。

そんなことを言えば鳳翔に怒られてしまうかもしれないが……。

『……氷川さん』

「なんだ?」

『それは命令なんですよね?』

「ああ、そうだ」

『了解しました』

『おい、東壺!そんな簡単に……』

『天龍さんが見たがってたテレポートを体験させてあげますよ』

『マジで!』

『あら、良かったね〜天龍ちゃん』

もう少し緊張感を持ってくれないだろうか。

それにしてもまさか八坂君が戦闘を前にここまで落ち着いているとは。ポケモン同士を戦わせることが日常茶飯事だったという話は聞いたが、それによる影響なのかもしれない。

『そういうわけなので氷川さんもしっかり見ててください。今から敵の背後に飛びますから。せーのっ!』

『うおおっ!』

『……さすがにビツクリねえ』

「し、信じられん……!」

「まさか本当にテレポートを!」

気持ちには備えていてもやはり実際目にするのにわかには信じがたい光景を前に誰もが驚嘆する中で、それを成した張本人はどこまでも冷静だった。

『今です。撃ちましょう』

『お、おう!天龍様の攻撃だ!』

『あはははっ!砲雷撃戦、始めるね』

『――10まんボルト』

砲撃による爆炎と、それを塗り潰すかのような目映い閃光。

その2つが晴れた時、すでにそこから深海棲艦の姿は消え失せていた。



「て、天龍、龍田、それから八坂東壺の以上3名、無事に戻ったぜ」  
旗艦である天龍の報告はどこかきこちないものだった。それもそのはず、テレポートを体験していても簡単に深海棲艦を撃破したらと思っただら、帰還命令を受けた2秒後には鎮守府に戻ってきていたからである。

もちろん八坂君のテレポートによるものだ。本当に、なんとというか……僕の中の常識が音をたてて崩れていく思いだ。

「みんなご苦労だった。怪我はないようだがゆっくりと休んでくれ」  
「ああ、そうさせてもらうぜ」

普段なら八坂君にもっと色々見せてくれとせがみそうな天龍が大  
人しく引き下がる。たぶんそれだけ受けた衝撃が大きくてまだ自分  
の中で消化できていないのだろう。

それは龍田も、そして僕も同じだ。

「俺も休んでいいんですか？ほとんど何もやってないんですけど  
……」

何もやってない、とききた。

いやまあ八坂君にとつてはそうなのかもしれないが、完全に未知な  
異世界の文化でぶん殴られた身としてはじゃあもう1度……とはな  
らない。

「構わないよ。それよりもまだ正式な軍属と決まったわけではないの

に戦闘に巻き込んでしまつて済まなかつた」

「いえいえ！むしろあれで少しは役立つと知つてもらえたら幸いですし」

少しは役立つどころではない。彼の存在によつて深海棲艦との戦闘が様変わりする可能性すらある。言葉を変えれば“革命”が起きるかもしれない。

それだけのことをやってのけた自覚が八坂君からは全く感じられなかつた。

どういう世界で生きてくればこんなことになるのか。

「それよりも提督？今『まだ正式な軍属と決まつたわけではないのに』つて言いませんでしたか？」

さすが龍田、勘がいいな。

今さら隠すことでもないのですその場で告げる。

「八坂君、実は大元帥をはじめ提督達の間で君を横須賀鎮守府に迎え入れたいという話が出たんだが……」

「本当ですか？ありがとうございます！」

「……君はそれでいいのか？」

「はい。そのために機会を設けてもらったわけですし。それに軍としてもこんな危なっかしい力を持つてる自称異世界人を野放しにはできないでしょう？」

「お前、言いくいことズバツと言うのな……」

天龍は呆れているが、八坂君の言う通りだ。言葉の端々から鎮守府……海軍に属したいという思いが滲み出ていたのもあつてトントン拍子で事が進んだ。

しかしそれだけ自分の立場が分かつていながら、どうして不用意に能力や戸籍も身寄りもない、利用しやすい人間だと自ら明かしたのだろうか。

彼がその先に待ち構えている未来を予想できないとも思えない。

「なら八坂君は横須賀鎮守府の一員になることを望む、ということでもいいんだね？」

「はい、よろしくお願いします」

「……分かった。では諸々の手続きが整うまでは申し訳ないが昨日の部屋で待機してもらおうことになる」

「了解しました」

「ははは、敬礼の仕方が違うぜ東壺！」

「え、そうなんですか？」

「海軍式の敬礼はこうやるの〜」

笑顔を浮かべながら龍田に敬礼を教わる八坂君の姿は年相応で、その不用意さもある意味では仕方のないことなのかもしれないと、そう思えた。

それが間違いだったと知るのは数日後。

横須賀鎮守府の提督が一堂に会した、八坂君の入隊式でのことである